

I 海に想う寓話 — だいちゃんとうみばあ —

なつやすみです。だいちゃんは、おじいちゃんがいるいなかにいきました。

おじいちゃんのいえからは、まっさおなうみが、ひろがっているのがみえます。

あるひ、だいちゃんはおじいちゃんと、はまべをさるぼをしました。

あさのさわやかなかぜが、やさしくだいちちゃんをなで、はだいろのすなはまには、しろいなみが、いったりきたりしています。

おじいちゃんは、いいました。

「どうだ、うみはおおきいだろう。そしてふかいんだ。うみには、たくさんのさかなやいきものがすんでいるんだ。すなはまにだって、かにやかいがもぐっているんだよ」

おじいちゃんは、りょうしきんなのです。

「おじいちゃんは、さかなやかいをとつてくらしているのさ。うみはにんげんにとつて、いやいや、いきものぜんぶにとって、すごーくだいじなところなんだよ」

「ふーん」

だいちゃんは、なみのおとをききながら、きらきらひかるうみをみながら、おじいちゃんのはなしをきいていました。

ゆうごはんです。おじいちゃんがつたおさかながおかずです。テレビがついています。

おにいさんやおねえさんが、タンクをしょって、ぎんいろのあわをだしながら、うみのなかをおよいでいました。

きれいだなあ、きもちよさそうだなあ、たのしそうだなあ、こころのなかでおもっていました。

そのよる、だいちゃんは、ゆめをみました。

じぶんが、うみにもぐっている、ゆめです。きっとおじいちゃんのはなしをきいたり、テレビをみたりしたからでしょう。

あおくすんだうみのなかは、おひさまのひかりがゆれています。いつか、えほんでみたオーロラのようにです。

サンゴしようには、あかや、きいろや、あおい、おさかなさんたちがむれています。ふかいほうでは、おきなおさかなさんが、ゆったりとおよいでいます。

まるで、おとぎばなしの、りゅうぐうじょうにきたようです。

「だいちゃん、いらっしやーい」

みんな、だいちゃんを、かんげいしてくれています。サンゴのすきまから、たこさんもみてくれています。だいちゃんはうれしくて、どんどんおよいでいきました。

すると、むこうに、ねずみいろのけしきが、みえてきました。おほかのようにみえました。それは、サンゴのしがいでした。そこには、きれいなおさかなさんたちは、いっぴきもいません。

だいちゃんは、とてもさみしいきもちになりました。だいちゃんは、サンゴのしがいにさわってみました。すると、うすちやいろのほこりが、ふわーっとまいあがつて、だいちゃんのまわりにただよいました。だいちゃんは、ちよつとこわくなりました。

どこからか、こえがきこえてきました。

「だいちゃん、よく、きたね」

「えっ、だれ」

まわりをみても、だれもいません。

「うみばあだよ」

「うみばあ、って？」

「だいちゃんの、おばあさんのおばあさん、そのま
たおばあさん、ずうーとずっとむかしの、おばあさんだよ」

「えっ、そんなおばあさん、ぼく、知らないよ」

「そうだね、うみばあがうまれたのは、なんじゅう
おくねんもまえのことだもね」

「ねえ、うみばあって、だれのこと」

「うみのことさ」

「どうして、うみが、ぼくのおばあさんなの？」

「うみばあは、おひさまとけっこんして、たくさん
のこどもをうんだのさ」

「ふーん」

だいちゃんは、うみばあということが、よくわかり
ませんでした。

うみばあは、いいました。

「うみばあは、おひさまから、ひかりをもらって、
いちばんさいしょに、しよくぶつプランクトンをうん
だのさ。きいたことがあるでしょ」

「うん、きいたことがあるよ。どうぶつプランクト
ンも、きいたことがあるよ」

「そうそう、しよくぶつプランクトンやどうぶつプ

ランクトンのおかげで、いろいろないきものが、うまれ、そだっていったというわけさ。だいちゃんも、そのひとりさ」

「でもぼく、うみのなかでくらししていないよ」

「そうだよね、うみでうまれたいきものうち、りくにすむようになったものもいたのさ。だいちゃんも、そのひとりさ」

「ふーん、そうなんだ」

「だから、だいちゃんがすきな、ライオンさんも、イルカさんも、おさかなさんも、こんちゅうさんも、きやはなも、みーんな、うみばあのごどもや、まごなんだよ。

このサンゴだって、うみばあのごどもや、まごさ」

「でも、このサンゴさん、しんじやってるよ」

「そう、だから、うみばあは、こまっているのさ」

「うみばあは、さむいうみにも、かいそうをそだてたり、ちきゅうのおんどをたもったりして、みんながあんしんしてくらせるようにしてきたけど、ちかごろは、うまくできなくなつて、サンゴもしなせてしまったし、かいそうも、じょうずにそだせられなくなつたのさ、かなしいよ」

「どうして、そうなちゃたの」

だいちゃんは、うみばあにきいてみました。

「それは、だいちゃんにとって、つらいはなしになるけど、ききたいかい」

「うん、だいじょうぶ」

「うみばあ、すえつこのにんげんが、うみばあをこまらせているのさ」

「どんなふうにして」

「にんげんは、じぶんたちが、すみやすくするために、べんりなものをたくさんつくってきたのさ。そういうものをつくったとき、みずや、くうきや、いきもののがいになるものが、たくさん出るんだよ。

そう、ごみのようなものを、にんげんは、うみばあのところばかりでなく、あちこちですててきたのさ。きれいだつたうみばあが、だんだん、きたなくなつてしまったんだよ」

「ふーん、ぼくたちのせいで、よごれちゃつたんだ。

でも、うみのみずは、すつごくあおくてきれいだよ」

「そうだね、でも、めにみえないものが、たくさんつけているのさ」

うみばあは、だんだんかなしいようになっていききました。

「だいちゃん、きいたことがあるでしょ、にさんか

たんそ」

「うん」

「にさんかたんそも、ものをつくるとき、たくさんでるのさ。いま、くうきちゅうに、にさんかたんそがふえすぎて、ちきゅうが、だんだんあたたかくなっていくんだよ。」

もりやうみばあが、にさんかたんそをすいとってきただけど、もりも、たくさんきをきられて、にさんかたんそをすいとることが、だんだんできなくなっているのさ。

だから、サンゴやかいそうを、そだてられなくなつてんのさ。

それをもっとできなくなると、おさかなさんたちも、すくなくなってしまう」

「じゃあ、どうなっちゃうの」

「このままだと、ずっとさきのことだけど、うみにもりくにも、いきもがすめなくなっちゃうかもしれないね」

「そんなの、やだあー」

「だいちゃん、たくさんべんきょうして、うみばあを、たすけておくれ。」

うみばあが、げんきになれば、だいちゃんたちやい

きものたちが、いつまでも、げんきにしあわせにくらせるちきゅうを、まもることができからさ」

「うん、わかった、べんきょうするね」

「そうそう、うんどうもして、じょうぶなからだもつくるんだよ」

「わかった」

しんがっきの、あさがきました。

まどからのやさしいおひさまのひかりで、だいちゃんはおきました。おだいどころでは、おかあさんが、あさごはんをつくっています。

「ねえねえ、おかあさん、ぼく、おじいちゃんのところでこんなゆめをみたんだよ」

だいちゃんは、ゆめのことを、おかあさんにはなしました。

おかあさんはいいました。

「とても、すてきなゆめをみたんだね。」

おかあさんも、うみばあをよごさないように、あぶらがついたおなべやおさらをふきとってからあらったり、ごみをちゃんとわけていたりしているのよ」

「そうだったんだー」

「ねえねえ、おかあさん、ぼく、タンクしよって、

うみにもぐりたいよー。そして、うみばあのこえ、も
つとききたいよー」

「そうね、おおきくなったらね」

「どのくらい、おおきくなったら？」

「そうね、こうこうせいとか、だいがくせいぐらいの、
おにいさんになったらね。」

それまでは、たくさんのごほんをよんで、うみばあ
のことをbenきようして、しっかりうんどうもして、
からだをきたえることが、だいじだからね」

「うみばあもいってたよ、うん、わかった。でも、
はやくおおきくなりたいなあ」

「そうそう、らいねんもおじいちゃんのところへい
って、うみのはなしを、たくさんしてもらうんだよ。
それに、すいちゆうめがねと、すのーけると、あしひ
れをつかっておよぐことを、おじいちゃんからおしえ
てもらえたらいいね」

「うん、ねえ、ゆめのおはなし、せんせいやきよう
しつみんなにはなしてもいい」

「そうね、きつとみんな、おどろくよ」

「いそいで、がっこうへ、いこーっと」

だいちゃんは、げんきよく、かけていきました。

おわり